



Title	中国蘇南農村の家屋の変化と人口的背景：江村の追跡調査（5）
Author(s)	坂下, 明彦; Sakashita, Akihiko; 朴, 紅 他
Citation	北海道大学農経論叢, 65, 131-141
Issue Date	2010-03-31
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/42908">https://hdl.handle.net/2115/42908</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	RAE65_012.pdf



# 中国蘇南農村の家屋の変化と人口的背景

## - 江村の追跡調査<sup>(5)</sup> -

坂下明彦・朴 紅・姚富坤

### The Changes of Farmers Housing and Population Background in the Sunan Area of China

#### - A Follow-up Research of Kaixiangong village (5)

Akihiko SAKASHITA, Hong PARK and Fukun YAO

#### Summary

In China, parents' property, including real estate, is inherited and divided by the children evenly. Therefore China does not have the same family property concept as in Japan. It does not have the family property symbolized by ' Gate and Warehouse '. But the room numbers of a house in China reflects personal property. This paper is to observe the changes of farm households' property through follow-up investigations of the farm industrialization process in Jiang-Cun. The development of settlements has changed from being along canals to roads and inland areas. In addition, the number of houses and the surface area of houses are increasing. We can understand the trend of the increasing number of houses from 'branching out' of family trees. Additionally, we have investigated the basic situation of a population which generates 'branching out' by research that has been done and by demographic movements during different time periods.

#### はじめに

中国においては、農地は均分相続であったため農家の家産概念は存在せず、日本における「門と倉」(註1)のような家産の象徴は存在しない。しかし、個々の「家」の財産の象徴として部屋の数があり、例えば「有4間房」(「4間の部屋持ち」)という言い回しがある。

ここでは、われわれが追跡調査を行ってきた開弦弓村(通称、江村)(註2)を事例として、農村工業化の過程での家屋の変容を通じて農家世帯と居住単位の変化を観察することとする。行論で明らかにするように、集落は運河沿いに展開していたものが道路交通への転換に伴いつつ内陸部側に拡大をみせ、家屋数の増加と家屋そのものの規模拡大をみせている。

ここでは、家屋の増加を分家を含む居住単位の独立化の過程と捉え、家系図により新たな居住単位創出の動向を把握する。その上で、これまでの

研究蓄積によりながら(註3)、人口変動の特徴を人口ピラミッドの変化と年齢階層別のコーホート分析から捉え、世帯と居住単位の変化の背景を明らかにする。

#### 1. 世帯と居住単位の変化

##### 1) 第13組の家屋の変化 - 家屋分布図から

2001年に合併する以前の旧開弦弓村は、かつての北村、南村、荷花湾からなっており、自然村としての開弦弓村(以下、開弦弓自然村)は北村・南村からなっていた。南北村は小清河という運河を境界としている。本論では、歴史的 analysis を行うため、この自然村を対象とする。集落は、西長圩、南圩、涼角圩、城角圩という4つの圩が隣接する地点にあり、東西に大きな水面(東庄蕩、西庄蕩)がある。1960年代までは、「圩」を縫って張り巡らされた運河が交通手段であり、家屋は運河側に正面の出入り口を持ち、列をなして分布していた

のである。第2次大戦前には東西に2つの橋（東橋と西橋）があったが、現在ではこの他に4つ（江村橋、震庵橋、南新橋、北橋）設置されており、西橋を幹線道路（震廟公路）が通っている。現在、この自然村には15の組があり、北側の3つの坪にそれぞれ3つの組が、南の城角坪に6つの組がある（朴ほか[2010]の図1を参照）。

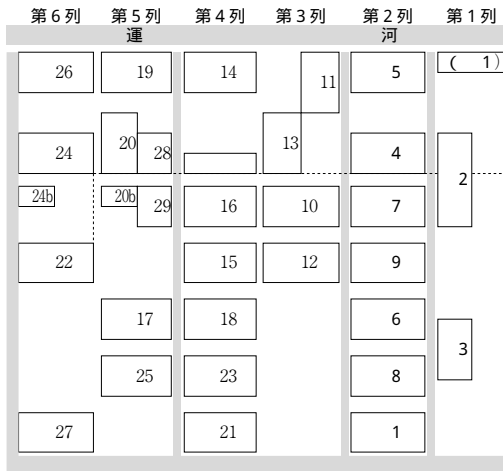


図1 第13組の家屋配置図

分析対象とするのは、第13組である。民国期（1930年代）には養蚕合作社の事務所・蚕室がおかれ、解放後は郷政府事務所、大隊事務所となり、文革期には下放青年の宿舎がおかれるなど、村の中心地であった（註4）。しかし、交通体系の変化とともに幹線道路沿いが村の中心となった。ただし、そのなごりか、1990年には運河からみて奥の桑畑に小学校が設置され、その移転後の2009年には村民委員会がおかれている。

2009年現在、第13組の不在者を含む世帯は、29戸である。その家屋の配置を示したのが図1である。図はややモディファイしているが、6列に並んでいる（図の上が北方向）民国期から1960年代までは、運河（小清河）沿の波線を引いた6ブロックのみに清時代の家屋が並んでおり、基本的には清時代からの同族が同居していた。その家系は主として東から姚1氏、趙氏、姚2氏、姚3氏、周1氏、周2氏であった。1935年時点での南村の姓別の家数は周姓が49戸（1位）姚姓が30戸（2位）、趙姓が7戸（4位）であり、大きな同族集団の一部がここに居住していたことがわかる（註5）。ほとんどが平屋であったが、周2氏は清時

代の官僚出身であり、築300年といわれる2階建ての家屋に居住していた。

1970年代から南側の水田、桑畑、水筒畑を潰して、後に述べる居住単位の分割とともに平屋の建設が進んだ。1間に1家族が居住するという貧困からの一定の解放が行われ、生活苦は改善された。1983年には基幹道路が建設され、交通路は次第に運河から道路に換わり、運河沿いの家が組の入り口であったものが、一番奥の位置に逆転することになる。

1980年代半ばまでは、平屋の天井の低い家が建築されたが、1980年代後半からは中央に土間をもつ天井の高い1階部分と居室である2階部分をもつ2階建てが一般化する。蚕との共生がやっと解消される。

旧開弦弓村全体でみると、1989年時点での新築家屋の合計数は235戸に及び、総戸数612戸の38.3%を占めている。1戸の建築費はおよそ2万円であり、合計は400万円を超えるものであった（註6）。やや古いのが、1985年の農家総所得は120万円であったから（註7）その4年分に相当する。その後も、1990年には51戸（建築費259万円）91年には71戸（同342万円）92年には32戸（同113万円）の家屋が建築されている。

表1 2階建て家屋の建築の推移（第13組）

年次	単位：棟、元				
	2階建築	増築	新築	累計	1人当純収入
1985	2			2	659
1986	4			6	
1987	5			11	
1988	1			12	1,115
1989	5			17	1,181
1990	2			19	1,120
1991				19	1,346
1992	4			23	1,873
1993	6		2	29	2,222
1994	2	1		31	2,931
1995				31	4,078
1996	1	1		32	4,879
1997				32	4,945
1998				32	5,106
1999				32	5,117
2000				32	5,246
2001				32	5,466
2002				32	5,632
2003	2			35	6,073

資料：村民委員会での聴き取りによる。  
注：純収入は、坂下他[2006]、85年は沈[1993]より計算した。

表1は、第13組の家屋の建設年を聞き取りによって整理したものである。家屋建築は、平屋を建築した後に2階部分を増築するケースもあるが、ここでは2階建て家屋としての建築年を示している。

1980年代後半ですでに29戸のうち17戸が、1996年までには都市戸籍の2戸を除き全戸が立て替えを完了している。

さらに、2000年代になると別荘風の家屋が建てられ、貧富の差が家屋に現れるようになる。

2) 「分家」と住居移転 - 家系図分析から

家屋の量的、面的拡大は、二つの側面を有している。第1は、1960年代までの運河沿いの6ブロックに大家族が同居するという「窮屈」からの解放であり、旧来からの同居親族の独立化の過程である。第2は、子供が結婚、分家を行い、やがて居住単位の独立を図る過程である。以下では、やや煩雑であるが、家屋の量的拡大がほぼ6つの列に沿って行われているため、個々に検討することにする。

a. 第1列 姚氏第1グループ

この列は、系譜は確定することができなかったが、姚氏(第1)の家系である(図2・1)。第12組との境界にあり、現在の家屋は2棟のみである。

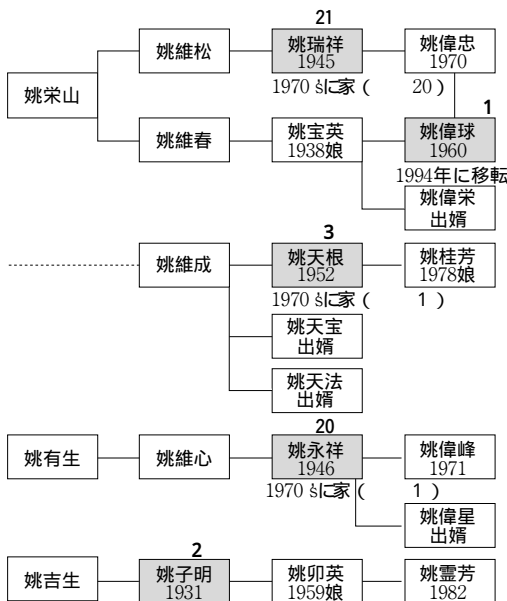


図2・1 姚氏第1グループの家系と家屋分割 (第1列)

現在、廃屋となっている 1の旧家屋と 2の一部に清時代から家屋が存在した。1から 3と 20(第5列), 21(第4列)が1970年代に分離し、新築家屋を建築して居住単位は4つになった(2は当初のブロックで独立)。なお、1そのものも1994年に第2列の道路側に移転している。

ここでの特徴は、家屋の量的拡大が同居親族の独立化のみであり、分家が一つも存在しない点である。この5戸のうち、男兄弟がいる家は3戸であり、3の第2人、1の弟、20の次男が婿入りしており、分家が回避されている。また、逆に婿養子を取った家が3戸あり、1の母、3の娘、2の娘が相続している。結局、家の新設はなかったのである。

b. 第2列 趙氏グループ

第2列目は、趙氏の家系である(図2・2)。最も運河寄りの5には清時代建築の家屋に4家族が同居していた。この3家族を「自家人」(身内)と呼んでいる。部屋数は7間であり、この他に台所と物置部屋があった。

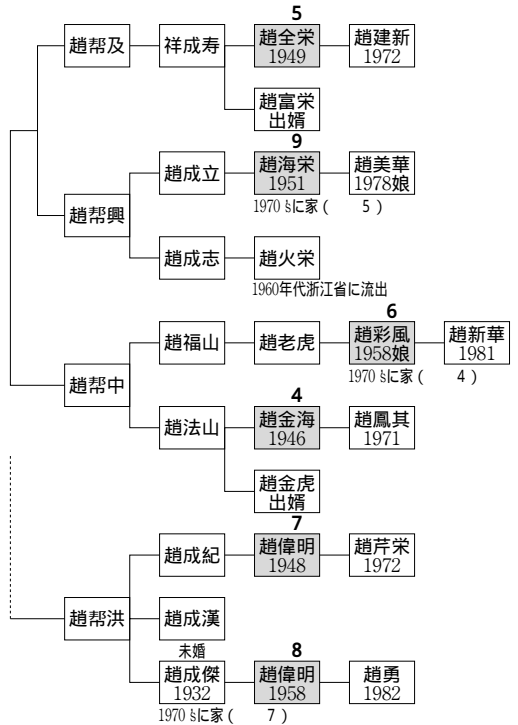


図2・2 趙氏グループの家系と家屋分割 (第2列)

まず、大躍進の混乱期の1962年に趙火栄一家が浙江省に乞食となって転出した。その後、1970年

代に 9, 4が独立して, 第2列内に家屋を建築した. これにより, 3戸が居住単位となった.

4からはさらに姪が婿を取って 6として独立している. 5と 4には弟が存在したが, ともに婿入りし, 分家は発生しなかった. 結局, この系譜は, 1戸の転出と2人の婿入りが行われたことにより, 家の新設がなかった. 5の家屋は, 1980年代前半までは1階建てであったが, 85年に2階部分を増築し, 現在に至っている.

現在の 7の所在地にも清時代の家屋があった.

7の親世代は3人兄弟であったが, 次男は未婚であり, 3男は1970年代に独立して 8となっている. このケースも分家ではなく, 同居家族の分離である.

結局, この列においても解放後の分家は発生せず, 4から 9の6戸が1列に並び形となっている.

**c. 第3列 姚第2(周)グループ**

第3列(図2・3)は, 姚氏(第2)の家系であり, 11, 13, 10の地点に清時代からの家屋が存在した. 姚姓は親戚関係にあるが, 系譜は辿れない. 11は運河沿いに立地しており, 古い家系である. 父の代は3人兄弟であるが, 2男, 3男は婿入りし, 分家は発生しなかった. 11自体は, 都市戸籍を取得しており, 息子も同様である(組に居住). 10も清時代からの系譜であるが, 1970年代に同居親族が分立して 12となっている. 12には弟がいるが, 婿入りし, 分家して

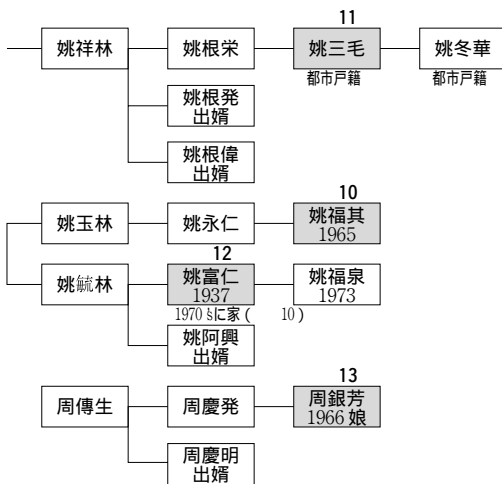


図2・3 姚第2(周)グループの家系と家屋分割(第3列)

いない. 周は, 民国期の転入者である. 13の父には弟がいたが, 婿入りのため分家していない. 本人は婿を取っている.

この列は, 同居親族が少なかったためか, 4世帯のみが居住しており, 空き屋が多い. 解放後の世帯の新設はなかったのである.

**d. 第4列 姚第3グループ**

第4列(図2・4)は, 姚氏(第3)の家系からなっている. 14の父は3人兄弟であり, 運河沿いの清時代の平屋に3家族が同居していた. 家屋の間取りは図3に示している. 1950年代にそれぞれが結婚し, 3夫婦とその子供, 10数人が5部屋ほどを分割して利用する状況であった. 次男は1967年に畜舎を利用して独立(16)隣接の空き地に平屋の家屋を新設している(その後, 1984年に2階を増築, 1994年に新築している)そのため, 14の家屋では, 長男と3男が3部屋ずつを利用するようになった. 3男は1978年に 16の南側に

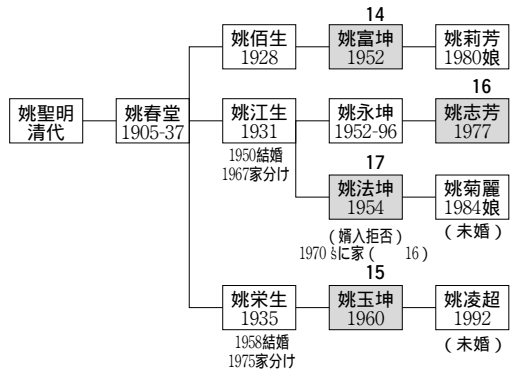


図2・4 姚第3グループの家系と家屋分割(第4列)

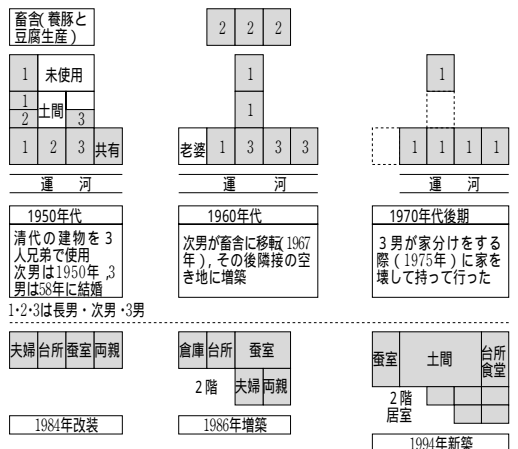


図3 14の家屋利用と増改築の過程

移転した(15)。その際には13の家屋の一部が利用された。ここは、1925年頃からは養蚕合作社の事務所、蚕室があり、解放後は開弦弓郷政府の事務所、1968年までは生産大隊の事務所として使用されていた。1969年には文革下の知識青年の宿舍と生産隊の倉庫が建築された。14の父は民国期にこの土地の所有権を有しており、文革後に改めて購入している(註8)。15はこの前者の建物を購入して移転したのである(91年に2階建てに増築)。また、後者を1998年に購入して、家内織物の工場としている(註9)。

15の独立により、居住単位は漸く3つに別れ、

15は5部屋を利用するようになった。1984年、86年には改装、2階建て増築が行われ、1994年には現在の2階建て家屋が新築されている。

16には弟があり、婿入りを予定したが拒んだために、1970年代に第5列に家を新築して分家している(17)。これが唯一の解放後世代の分家である。

**e. 第5列 周第1グループ**

第5列(図2・5)は、周氏(第1)の系譜である。運河沿いの19、28に清時代からの家屋があった。19からは18が1970年代に独立して第4列に家屋を建築し、親族同居が解消されている。19の長男は1980年代に都市戸籍となって廟港郷に居住しており、1986年に建築した平屋を出稼ぎ労働者に賃貸している(独身男性)。19の家は次男が継承している。28は、軍人であり、転出している。この跡地に、1から独立した20が家屋を建築している。28は残っていた清時代の家屋が崩壊したため、2008年に賃貸目的で平屋

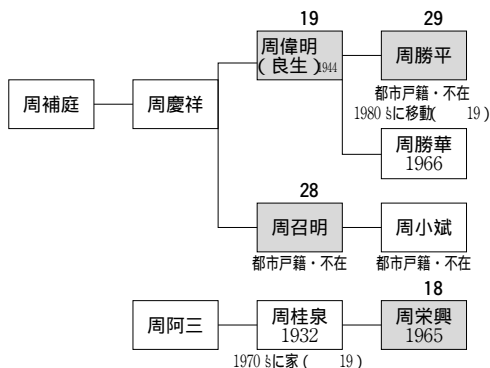


図2・5 周第1グループの家系と家屋分割 (第5列)

を新築し、出稼ぎ労働者に賃貸している。この列の居住者は2世帯となっている。

**f. 第6列 周第2(姚)グループ**

第6列目(図2・6)は、周氏の別の家系のグループである。24、26のブロックには、清時代の官僚(清末にはかなり没落)の築300年の家屋が存在した。24の弟は1972年に結婚し、第5列の道路側に1975年に家屋を建築している。26は、24から分離して家屋を敷地内に建てている。本人は廟港郷の高校教師であり、都市戸籍を有している。この家は、1985年築の2階建てを増築して93年に3階建てとしている。組内でも最も高級な家屋である。26の妹(都市戸籍)は婿養子を取り、1993年に第6列の道路沿いに高級な家屋を建築している(27)なお、27は1.2万元で都市戸籍を購入しているという。

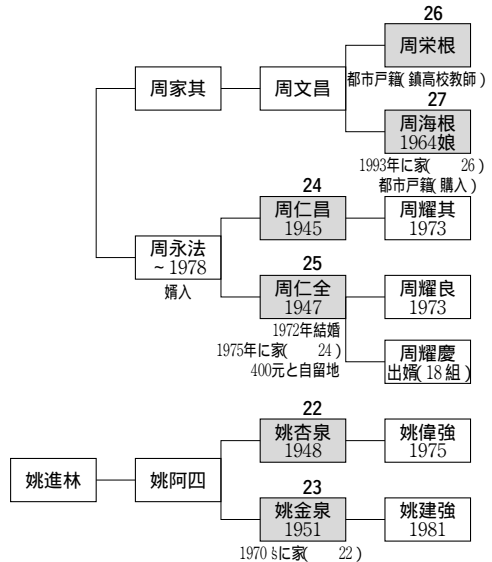


図2・6 周第2(姚)グループの家系と家屋分割

姚(第4系列)は、民国期に転入しており、22の位置に家屋を所有していたが、1970年代には弟の23が独立し、第4列に家屋を建築している。この列では、やや特殊な分家が1戸生まれている。

**3) 世帯の変化と婚姻圏**

以上、3世代にわたる同族別の農家世帯と居住単位の変化を細かくみてきたが、分家が著しく限定されていることがわかった。この点を確認しておこう。表2は現在居住する27戸のうち、都市戸

表2 第13組の世代別の戸主数と出入り関係  
単位：人

	第1世代	第2世代	第3世代	合計
人数	21	24	24	69
平均生年	1922年	1948年	1974年	
入婿	0	2	5	7
分家	0	3	0	3
出婿	0	6	3	9

資料：聞き取り調査により作成。

注：1) 都市戸籍5戸を除く24戸の数字。出婿は外数。

2) 第1世代の生年不明者は第2世代の年齢から25歳引いて推計した。

籍で年齢情報のない3戸（他に家屋賃貸2戸）を除く24戸の戸主数を世代別に整理したものである。

第1世代は21名であり、これが運河沿いの6ブロックに居住していたことになる。生年は1920年以前が6名、1920年代後半が6名、30代前半が5名、20代前半が4名で、平均生年は1922年となる。解放時にはちょうど青年期である。第2世代は24名であり、1940年代後半が9名、50年代前半が5名と多く、平均生年は1948年である。結婚は1970年代であり、この頃に第1世代が独立した家屋を建築し、組はその居住領域と戸数を拡大したのである。解放後生まれの第2世代の中で分家をしたのは、17、23、25の3名であり、6名は外部に婿入りした。2名が婿養子を取って、女性戸主となっている。世帯数は21戸から24戸となった。第3世代は24名であり、1970年代前半が8名、80年代前半が6名と多く、平均生年は1974年である。改革開放期に成長した世代である。この期には分家はなく、婿としての他出が3名いる。5名が婿を取って女性戸主となっている。この結果、世帯

の増加はない。このように、分家は期間を通じて3戸しか発生しておらず、9名が婿として他出しているのである。逆に、女性の跡取りに婿を迎えるケースが7名となっている。

ここで、補足的に婚姻圏についてみてこう。図4は、現在の家族世帯員の出生地を世代別に示したものである。人口ピラミッドの分析は次に譲る。民国期生れ、すなわち解放初期の段階での婚姻圏はサンプルが少ないものの組内に限定されている。人口増加の第1の山である解放後から10年間に出生したものは、1970年代に婚期を迎えているが、ここでは村内からの婚姻が増加をみせている。人口増加の第2のピークである1970年代生まれでは、村外者（ならびにそれを多く含むと考えられる不明者）との婚姻が増加している。このように、婚姻圏を徐々に広域化しながら、新世帯が形成されているのである。また、婿入りについては、サンプルは少ないが、組内と不明（村外）とに分かれており、比較的近隣から受け入れていることがわかる。

以上、第13組を対象に農家世帯の分化について観察してきたが、その人口的背景の説明に移ることにする。

## 2. 居住単位分割の前提としての人口変動

### 1) 人口動態の観察

表3、表4は、開弦弓自然村について、1935年から2009年までの四半世紀の人口変動を示したものである。表3によると、日中戦争前の村の人口1,400人は、解放を経て集団化が始まる前まで変化せず、文化大革命前に1,900人と第一次のピークをなし、1970代には減少して1,700人となった。改革開放後には増加し、1,800人台になり、その後急速に減少して1,600人台になるという複雑な動きを示している。全国的は人口爆発を起こしているにも関わらず、ここではそうした動きは認められないといえる。この結果、農家世帯数も1935年の360戸から2009年の444戸とその増加は低く抑えられているのである。

もう一つの大きな特徴は、人口の男女比が近年まで圧倒的に男子優位であった点である。民国期においてすでに男子の割合は53.0%であったが、解放後の1956年には55.8%と最高値を示し、改革

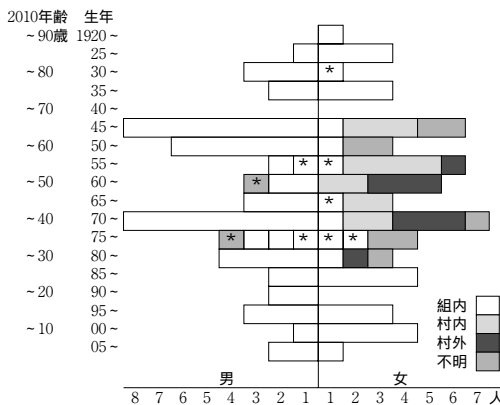


図4 第13組の出生地別人口ピラミッド(2009年)

資料：村民委員会資料により作成。

注：25戸，男性53人，女性57人のデータである。

表3 開弦弓自然村の人口変動

年次	計	男	女	男割合	単位：人，%	
					60歳以上	15歳未満
1935	1,455	771	684	53.0	6.4	32.2
1956	1,440	804	636	55.8	6.5	30.4
1966	1,899					
1981	1,761	950	811	53.9	11.1	24.7
1985	1,826	940	886	51.5	12.3	19.1
1990	1,834	921	913	50.2	15.0	16.9
2009	1,645	816	829	49.6	25.9	9.1

資料：沈[1998]の資料により作成。但し、1966年は師  
[2004] p.26, 2009年は村民委員会の数字。

開放が始まった81年においても53.9%の水準であった。これがほぼ平準化するの1990年であり、2009年には逆にやや女子人口が多くなっている。

こうした人口抑制に関わるファクターは、第1に間引き慣行の存在であり、第2が国家的人口抑制政策であった。間引き慣行は、女子を対象としたものが多いが(註10)、沈[1993]には驚くべき実態が数字として示されている(表5)これは年代別に出生数と溺嬰数を示しており、1950年代には出生数374人に対し間引き割合が22.7%、60年代は同223人に対し同31.4%を示すのである。この期間に年齢別人口がわかるのは1956年のみであるが、5歳未満人口は173人で、そのうち男は113人、女は60人であり、その比率は2:1となる。これは表5から算出した比率とほぼ一致する(註11)1970年代になると、この慣行は急速に減少する。ただし、これに代わって、人口そのものの統制が行われる。「計画生育」は、1964年から宣伝として開始され、1971年には子供2人以上の女性の避妊手術の指導、74年の出産期間の4年以上の

表5 出生と間引き慣行

	単位：人，%		
	出生数	溺嬰数	比率
1950年代	374	85	22.7
1960年代	223	70	31.4
1970年代	290	12	4.1

資料：沈[1993] p.22による。

奨励と段階的に強化され、1981年からの「一人っ子」政策の実施が決定的に人口変動に影響を与えている。このことは、前掲表3の15歳未満人口の極端な現象に現れており、平均寿命の長期化の影響もあるが、解放後に30%を示したその割合は、1985年には20%を割り込み、2009年には9.1%、150人(男性67人、女性83人)となっている。これと対照的に、60歳以上の人口は増加傾向にあり、1990年には15.0%、2009年には25.9%となっている。ただし、これは一方的な農村の高齢化を示すものとはいえず、3世代家族が基本であることも確認している(註12)。

図5は、2009年時点での開弦弓の人口ピラミッドを示している。1950年代前半生れ(50歳代後半)までは、増加型を示しており、これは1935年および1956年の人口ピラミッドでも確認できる(註13)。この時期は極端に女性比率が低い点はすでに述べた。ただし、56年ピラミッドでは、日中戦争期の人口減少が現れているが、09年ピラミッドでは60歳代後半でややみられるに止まる。極端な減少が現れるのは、出生が1950年代後半からの10年間の

表4 年齢別人口の推移

年齢階層	1935			1956			1981			1990			2009		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
71~	19	4	15	36	13	23	76	33	43	103	44	59	214	105	109
~70	29	10	19	22	9	13	53	28	25	78	35	43	67	28	39
~65	46	14	32	35	17	18	66	29	37	95	52	43	145	61	84
~60	69	30	39	68	31	37	87	44	43	118	70	48	177	94	83
~55	78	40	38	72	42	30	107	58	49	100	62	38	127	70	57
~50	55	26	29	84	44	40	126	78	48	89	52	37	134	74	60
~45	83	45	38	83	47	36	101	63	38	159	87	72	164	86	78
~40	124	69	55	97	54	43	94	58	36	195	94	101	148	75	73
~35	109	84	45	106	56	50	162	88	74	117	54	63	98	52	46
~30	136	75	61	109	52	57	202	100	102	174	77	97	62	28	34
~25	115	63	52	164	90	74	110	61	49	176	80	96	76	32	44
~20	122	68	54	126	68	58	142	82	60	120	56	64	83	41	42
~15	133	72	61	102	66	36	170	97	73	110	48	62	64	28	36
~10	132	73	59	163	102	61	130	65	65	90	57	33	51	32	19
~5	205	118	87	173	113	60	135	66	69	110	53	57	35	23	12
合計	1,458	771	684	1,440	804	636	1,761	950	811	1,834	921	913	1,645	829	816

資料：沈[2007] pp.18-19 2009年は村民委員会資料より作成。

時期（45～55歳）であり、「大躍進」で疲弊した後の災害の集中によるものである。その後、1960年代半ばからの10年間（35～45歳）の出生率は増加を示している。これ以下の年代は全て減少に転じており、逆ピラミッド型になっている。これについては、「一人っ子」政策の影響、大躍進期の二世世代の影響、農村工業化による社会減が考えられる。

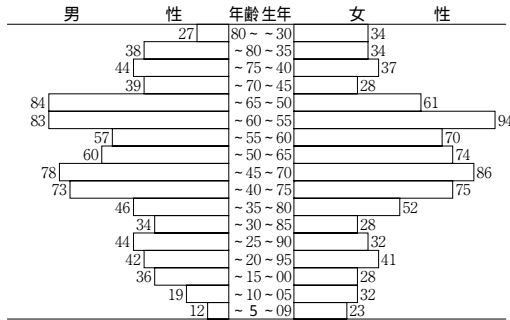


図5 開弦弓自然村の人口ピラミッド（2009年）  
資料：村民委員会資料により作成。  
注：簡略化のため、生年は1年ずらしている。

2) 年齢進行による人口変動の分析

以上の人口変動のうち、社会的要因を明らかにするために、5つの時点の5年刻みの階層別データをコーホートの手法で分析を行うこととする。74年間を4期に区分するが、その間隔はおよそ20年（1935-56年）、25年（1956-81年）、10年（1981-90年）、20年（1990-2009年）とばらつきがある（階層は簡略化のため0、5年を基準年とした）。ただし、偶然ではあるが、時期区分としては妥当な年次である。比較に当たっては、移動後年次の年齢階層を56～60歳層が最上層となるように基点年次の階層を設定した。このため、比較年次の間隔

表6・1 年齢階層別のコーホート（1935-56年）

生年階層	単位：人，%														
	1935						1956						1956-35		
	年齢階層	計	男	女	計	男	女	年齢階層	計	男	女	増加率			
～1899	～40	124	69	55	68	31	37	～60	-45	-55	-33				
1900～	～35	109	84	45	72	42	30	～55	-34	-50	-33				
1905～	～30	136	75	61	84	44	40	～50	-38	-41	-34				
1910～	～25	115	63	52	83	47	36	～45	-28	-25	-31				
1915～	～20	122	68	54	97	54	43	～40	-20	-21	-20				
1920～	～15	133	72	61	106	56	50	～35	-20	-22	-18				
1925～	～10	132	73	59	109	52	57	～30	-17	-29	-3				
1930～	～5	205	118	87	164	90	74	～25	-20	-24	-15				
合計		1,076	622	474	783	416	367		-27	-33	-23				

資料：沈 [1998] より作成。

によって取り上げた階層数は異なることになる。

まず、第1期は1935年と56年の20年間である（表6・1）。この時期は、上海事変前夜から大躍進前までの時期であり、いわば「戦乱と復興」の時期と位置づけることができる。この時期の特徴は、8階層全ての性別・年齢別階層で人口減少を示しており、全体でもマイナス27%と4期を通じて最も高くなっている。つまり、1935年時点で40歳未満層のうち27%が56年には死亡しているのである。男性の死亡率が高く、特に56年で46歳以上60歳以下の男性の生存率は50%程度となっている。したがって、56年時点で40歳以下層の相対的割合が高くなり、この層の女性比率も高まっている。ここでは20歳以下層の動向はわからないが、表4でみる限り出生率は増加しているとみられ、全体として増加型の人口ピラミッドを形成しているといえる。

第2期は、1956年から81年の25年間である（表6・2）。人口増減率は、7階層のうち男性は6階層でマイナス、女性は4階層でマイナスを示す。全体ではマイナス7%で、前期から比較すると社会減は少ない。この時期は、大躍進と人民公社の時期に相当する。大躍進期（1956～62年、自然災害期を含む）の餓死者は、全国で2,000万人といわれるが、その影響は、表出外の1956～65年の出生者層で圧倒的に高いとみられ、実際1981年の16～25歳層の人数は、110人と142人になっている。表でこの影響が現れているのは、大躍進期に20歳代であった2つの階層の女子であり、それぞれマイナス35、34%を示す。窮乏化の中で浙江省などへの結婚流出が行われているのである。この期間のもう一つの特徴は、1945～55年の出生階層の女子が、プラス21、70%を示しており、男女比の極

表6・2 年齢階層別のコーホート（1956-81年）

生年階層	単位：人，%														
	1956						1981						1981-56		
	年齢階層	計	男	女	計	男	女	年齢階層	計	男	女	増加率			
～1924	～35	106	56	50	87	44	43	～60	-18	-21	-14				
1925～	～30	109	52	57	107	58	49	～55	-2	12	-14				
1930～	～25	164	90	74	126	78	48	～50	-23	-13	-35				
1935～	～20	126	68	58	101	63	38	～45	-20	-7	-34				
1940～	～15	102	66	36	94	58	36	～40	-8	-12	0				
1945～	～10	163	102	61	162	88	74	～35	-1	-14	21				
1950～	～5	173	113	60	202	100	102	～30	17	-12	70				
合計		943	547	396	879	489	390		-7	-11	-2				

資料：沈 [1998] より作成。

端なアンバランスから大量の結婚による流入があったことを示している。動向を把握し得ない25歳以下層では、1965～70年出生層で170人と増加するが、1970年代出生層では減少がみられ、人口抑制政策の効果が現れているようである。すなわち、1981年からは逆ピラミッド型へ移行が始まっているのである。

第3期は、1981年から90年までの改革開放下の10年間で、1980年代の動きを示している(表6・3)。この期間の人口変動は、男性が10%の社会減、女性が10%の社会増と対照的な動きを示す。男性では、1990年時点での35歳以下の5階層が急速に減少をみせており(81年の371人から90年の315人、15%の減少率)、この多くは就業による村外流出と考えられる。逆に、20歳から35歳以下の3階層の女性が急増しており、前期からの村外の嫁入りが継続していることがわかる。この結果、男女比がほぼ1:1の割合となる。対象外の10歳以下層は、90人、110人となっており、少子化はさらに進行している(前掲表4)。

表6・3 年齢階層別のコーホート (1981-90年)

生年階層	単位:人,%								
	1981			1990			1990-81		
	年齢階層	計	男	女	計	男	女	年齢階層	増加率
~1934									
1935~	~45	101	63	38	100	62	38	~55	-1
1940~	~40	94	58	36	89	52	37	~50	-5
1945~	~35	162	88	74	159	87	72	~45	-2
1950~	~30	202	100	102	195	94	101	~40	-3
1955~	~25	110	61	49	117	54	63	~35	6
1960~	~20	142	82	60	174	77	97	~30	23
1965~	~15	170	97	73	176	80	96	~25	4
1970~	~10	130	65	65	120	56	64	~20	-8
1975~	~5	135	66	69	110	48	62	~15	-19
合	計	1372	758	614	1358	680	678		-1
									-10
									10

資料:沈[1998]より作成。

第4期は、現在に至る1990年から2009年のおよそ20年間であり、農村工業化の時代である(表6・4)。この期間では、男性の社会減が2%に止まり、逆に女性の社会減が6階層で起き、平均で17%を示しており、前期とは異なった動きをしている(註14)。特に前期で増加を示していた1955～70年出生層が大幅に減少しているが、この要因は不明である。男性については、2009年時点での20歳代(2階層)で急速な村外流出がみられるが、55歳以下層、40歳以下層での増加が認められる。この要因も不明である。対象外の20歳以下層につ

いては、各層で100人を割っており、5歳以下層ではわずか35人となっており、少子化はさらに進行し、図5に示したように逆ピラミッド型化が益々進行しているといえる。

表6・4 年齢階層別のコーホート (1990-2009年)

生年階層	単位:人,%								
	1990			2009			2009-90		
	年齢階層	計	男	女	計	男	女	年齢階層	増加率
~1954	~40	195	94	101	177	94	83	~60	-9
1955~	~35	117	54	63	127	70	57	~55	9
1960~	~30	174	77	97	134	74	60	~50	-23
1965~	~25	176	80	96	164	86	78	~45	-7
1970~	~20	120	56	64	148	75	73	~40	23
1975~	~15	110	48	62	98	52	46	~35	-11
1980~	~10	90	57	33	62	28	34	~30	-31
1985~	~5	110	53	57	76	32	44	~25	-31
合	計	1,092	519	573	986	511	475		-10
									-2
									-17

資料:沈[1998]および村民委員会資料により作成。

### 3) 人口変動と居住単位

以下では、これまで考察してきた人口変動と世帯、居住単位の間を、第13組の動向を念頭におきながら改めて整理しておこう。

第1期は「戦乱と復興」の時代(1935～56年)であり、人口は戦時期に減少し、復興期に増加に転じているが、回復は果たしていない。戦乱期には1940年時点で45歳以上の男性の死亡率が極端に高い。第13組の第1世代の平均出生年は1922年であるから第二次大戦後で20歳前半、解放後が20歳後半期となる。彼等は、土地改革により先代とともに自作農として農業に従事し、婚期を迎え、第2世代を出生する(平均生年は1948年)この時期にも間引き慣行は行われており、子供は男子が圧倒的に多かった。1950年代にはこの親子世代が先代を加えた3世代家族として、同族とともに運河沿いの清時代の建築の平屋に密集して居住することになる。

第2期は大躍進から人民公社の時代(1956～81年)である。人口は大躍進期に若年層を中心に大量の死亡があり、当時20歳代の女性は窮乏対策として浙江省などに嫁に出された。1961年には人民公社の再編が行われて3級制の施行(生産大隊のもとに生産隊を設置)と自留地の配分が行われ、稲作の生産性も上昇して1960年代半ばには一定の落ち着きをもたらされる。これを基礎に人口の増加が進行する。1970年代に入ると、第2世代が婚

期を迎える。ただし、男兄弟の場合でも分家は少なく、婿入りする形態が多かった。間引き慣行は男女比において極端の男性過剰をもたらし、そのため婚姻圏が拡大され、1970年から嫁入りによる女性の社会増が発生する。これにより、第3世代が出生する（平均生年1974年）。ただし、大家族による居住には限界が来ており、経済的にも一定の余裕ができたため、第1世代が独立して住居を構えるようになる。組の居住空間は拡大し、居住単位も増加をみせる。

第3期は改革開放の時代（1981～90年）である。農地の請負制が実施され、生産においても家族経営が行われるようになり、多就業化も進展をみせ、若年男子労働力の村外流出が現れる。人口は全体では増加するものの、このために男性は減少に転じる。「一人っ子」政策により、15歳以下の人口は前期の停滞から減少に転じる。他方で、嫁入りは前期に引き続いており、人口増加の一因である。この時期は、居住単位の増加は余りみられないが、経済力の向上により、2階建家屋の新築・増築が1980年代後半から増加をみせている。

第4期は農村工業化の時代（1990～2009年）である。人口は男女ともに減少に向かい、少子化による15歳以下層の減少が甚だしい。農村企業の私営化が1990年代後半から進み、農家の兼業化、自営業化が進展をみせ、農業は縮小している。第3世代が1990年代になると本格的な結婚適齢期を迎えている。その際、婿養子が増加していることが一つの特徴である。婿養子は以前から一定の頻度でみられたが、少子化と男女比の是正によりその数は1980年代後半から増加を示しているのである（表7）。第13組においてもその傾向は現れている。結婚に伴う家屋の増築や新築は、前期に引き続き行われている。

このように、居住単位の変化は、人口変動とそれに規定された結婚の形態に大きく規定されており、1990年代までに現在の形態がほぼ完成された

表7 入り婿数の変化

（旧開弦弓村，2009年現在）

生年別	単位：人								計
	1945～	50～	55～	60～	65～	70～	75～	80～	
村内	2	3	1	1	7	3	2		19
村外		1	1	3	4	10	2		21
不明		1		2	7	13	6	5	34
合計	2	5	2	6	18	26	10	5	74

資料：村民委員会資料により作成。

といえるのである。

## おわりに

蘇南農村は水郷に立地し、狭隘な農地基盤の上に家族経営が展開してきた。農村住民の資産の象徴は家屋の間数といわれ、兼業収入により3階建て家屋が林立する村もみられる。そこで、本論では開弦弓村の一つの村民小組を対象に、居住単位としての家屋に注目し、組内でのその拡大過程を同族ごとの家系を辿ることで示した。また、家族構造の変化の背景にある人口変動の特徴を限られたデータを活用して解釈することができた。

組内での居住単位の面的・量的拡大は民国期の親族同居の分化が基本であり、解放後の新たな分家による居住単位の形成は極めて限られたものであることが明らかとなった。これは、女子を対象とする間引き慣行が出生率を低く抑え、男子の次三男についても婿養子の形で分家を極力回避してきた結果であった。他方で、政策による少子化と男女比の不均衡は後継男子を持たない家を生み出し、婿養子の受け手を形成した。居住単位の分化は人民公社が一定の安定期を迎えた1970年代の経済的背景により進んだ。そして、その後の現在の戸主の結婚に併せ、2階建て化が1980年代半ばから進行している。この背景には兼業化による農家所得の向上がある。

これらの建物は蚕室と作業場のスペースを広く採ったものが多く、稲作と養蚕が縮小した現段階では実情に合わなくなっている。第3世代から次世代への継承の過程で、再び家屋構造に変化が生じるのであろう。

## 注

- (1) 川口[1975]を参照。
- (2) 坂下ほか[2006]、朴ほか[2006]、朴ほか[2008]を参照。
- (3) 費[1939]、沈[2007]、師[2004]、王[2004]、周[2006]を参照。
- (4) 村の行政組織の変化については、坂下ほか「2006」を参照。
- (5) 費[1939]p.12。
- (6) 王[2004]を参照。
- (7) 沈[2007]p.135。

- (8) 宅地に関しては私的土地所有権が継続していたのである。
- (9) 13組の農家の就業構造については、朴ほか[2008]を参照。
- (10) 費 [1939] 3章3節「人口統制」p.53～55を参照。
- (11) 1950年代と60年代の5ヶ年平均出生数は149人、これを男女比1：1とすると男性が74人、5ヶ年平均溺嬰数は39人であり、これを全て女子とすると女子の生存者は35人となる。合計109人、男性74人、女性35人であり、総人数は1956年の173人の63%と低い、男女比は2.1：1となる。
- (12) 朴ほか[2008] p.73を参照。
- (13) 沈[2007] pp.19～20。
- (14) 1980年から2000年までの旧開弦弓村における人口変動については、朴ほか[2008] p.72を参照。

### 【参考文献】

- (1) 費孝通『江村経済』江蘇人民出版社，1986（原著，1939年，ロンドン）〔引用は仙波泰雄・塩谷安夫訳『支那の農民生活』生活社（1939年）を使用〕
- (2) 沈関宝『一場静悄悄的革命』（静かな革命）雲南人民出版社，1993（中文）〔引用は上海大学出版社版（2007）を使用〕
- (3) 師和『江村自治 - 社会変遷中的農村基層民主』江蘇人民出版社，2004（中文）
- (4) 王匯氷『江村報告 - 一個了解中国農村的窓口』人民出版社，2004（中文）
- (5) 周擁平『江村經濟七十年』上海出版社，2006（中文）
- (6) 川口諦「和田伝『門と倉』をめぐる覚書」『農業総合研究』29巻2号，1975
- (7) 坂下明彦・朴紅・市來正光「中国蘇南地域における農業生産システムの変化と土地問題 - 江村の追跡調査(1)」『農経論叢』第62集，2006
- (8) 朴紅・坂下明彦・市來正光「中国蘇南地域の農村工業化と就業構造 - 江村の追跡調査(2)」『農経論叢』第62集，2006
- (9) 朴紅・市來正光・坂下明彦「中国蘇南地域における農家の就業構造の特質 - 第13組のモノグラフィー - 江村の追跡調査(3) - 」『農経論叢』第63集，2008
- (10) 朴紅・坂下明彦・姚富坤「中国蘇南地域における農地転用と農地調整 - 江村の追跡調査(4) - 」『農経論叢』第65集，2010